

(財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス

活動センターだより

2009年度 第1号 (8月25日発行)

2009年度 修学院フォーラム「老い」－この美しい約束のいのちに向かって－ 第1回

「与えられたいのちをともに生きる」

2009年4月18日 (土) 13:30 ~ 17:30

講師：神田 美子 (京都大学小児血液病棟ボランティアグループ「にこにこトマト」事務局代表)
岡部 元英 (日本バプテスト連盟北白川教会牧師)

今回は、小児病棟でのボランティアグループ「にこにこトマト」の代表の神田美子さんと、ターミナルケアに長く携わってこられた岡部元英牧師 (日本バプテスト連盟) からの発題を受け、話し合いを持ちました。



神田さんの発題では、諸感覚が失われたかに思われていた小児が、ボランティアの奏でる音楽に反応したり、喜ぶ親と共に笑ったりした例などが紹介されました。共通感覚やノエマ的自己といったことを考えさせられます。



また岡部元英牧師の発題で、しばしば言葉を失うしかない中で、牧師として何ができるのか苦悩した、と話されました。誠実な発言ですが、それ以上に言語の可能性を考えさせられました。語り得なくなったところから、

いのちの「言葉」を聞き取る作業が始まります。そして、多分、存在の意味もそこから聞き取っていくことでしょう。

このプログラムは、前年度の「人生の朝と夕べをいかに生きるか」での課題、すなわち「年を重ね、何もできなくなり、ただ存在しているだけになっても、生きること

の意味とは何かを考える」を引き継いでいます。この課題の背後には、命が無化され、存在の意味が否定されていく現実が横たわっています。存在の意味は、自己認識にかかわりますが、それは他者との関係抜きには考えられません。しかし、現代社会においては、人と人とのつながりがずたずたに分断されて来ていますし、またわたしたちが分断してきたのです。「この美しい約束のいのちに向かって」という副題は、無化され、否定されていく「いのち」が聞き取った神の肯定の声を反映しています (70人訳聖書・創世記1:31)。フォーラム「老い」では、その超越的な肯定の声を肉なるものが聞き取っているという視点が、思索の鍵になると思われます。

「はなしあい」の限られた時間の中で、問題点を展開することの困難を覚えています。講演を参加者が関与している諸分野の共通言語に変換していくことが「はなしあい」の前提になります。しかし、M. アンリが指摘するように、ガリレイ以来の近代世界の思考が「生」を否定していること、対話者自らもそこから自由ではないこと、また、前述しましたように他者との関係が分断されている文化 (あるいは言語) 支配の中にあることを自ら認識しない限り、「はなしあい」自体が成立しなくなっているように思いました。それだけに、「はなしあい」の課題も祝福も大きいということでしょう。

鈴木和哉 (日本キリスト教会吉田教会牧師)

《参加者アンケートから》

・子供と高齢者の組合せは意外性があった。両者ともその瞬間を生きていることを表して伝えてくれる点は同じだと思う。

2009年度 修学院フォーラム「福祉」－福音信仰の〈場〉を拓く福祉－ 第1回

「聖書は果たしてこの世の闇を照らす光なのか？」

福音信仰と福祉の関係を捉えなおす（マルコ1,21-34）

2009年4月24日（金）18:00～4月25日（土）15:00

講師：岡山 孝太郎（京都基督教福祉会理事長）

この5回に亘るフォーラムの目的は、市場原理、すなわち力の原理が経済活動のみならず人間生活の全面にまで拡大され、教育も福祉も文化もさらに宗教に至るまで深く浸透し、キリスト教主義社会施設までその波に呑み込まれている今日、営利追求のターゲットにまで転落した現代の福祉の立ち返るべき原点は何かを、聖書に問うことにある。

その第1回の今回の集まりには、福祉施設で働く人も含めて30名もの人が参加し、その多くの方が宿泊を共にし、ゆっくり考え合った。二日目には、会場を萌出る緑に包まれた能舞台に移し、参加者は心なごむ雰



囲気の中で、心を通わせ合うことができた。日帰りではなく、宿泊プログラムであったがゆえに、豊かになり得たプログラムであった。

講師は、福音書のイエスの歩みを丁寧に

辿りつつ、次のように語りかけた。

福祉は、「時は満ちた、神の国は近づいた」、「見よ、すべ



ては新しくなった」と告げられる福音の現実の中に拓かれていく。古い生は打ち砕かれて、思いがけない生が私たちの中にかたちづくられていく。神の現臨は人間の弱さを造りかえていき、むしろ「弱さこそ聖なるもの」として立てる。福祉は、この事実の証言に他ならない。主イエスに出会うということは、生の慰めや勇気づけではなく、生そのものの大いなる転換である。福祉が人間の間で引き起こしていくのは、正にこの生そのものの転換である。

福祉は、神から賜わる喜びから始まり、限りなく増殖し、存在するすべてを包みこむ波紋となって広がる特質を宿している。喜びは、人を活かし、人を共に結び、共生を創り出すダイナミックな力「福祉」として働く。

福音主義信仰に立つ福祉は、その根拠を「神われらと共におられる」という共生の原事実におく。福祉の課題は、共同の祝宴を荒野に設けることである。

小久保 正（中部大学生命健康科学部教授）

《参加者アンケートから》

・福祉とは何かということについて、聖書的、また、信仰的な観点から示していただき、私自身の大きな糧となりました。

「人間関係トレーニング ～グループファシリテーションを学ぼう～」

2009年5月9日（土）16:00～5月10日（日）12:00

講師：山本 智也（京都ノートルダム女子大学准教授）

自分の他者との関わり方に気づき、ゆたかなコミュニケーションを築くために、京



都ノートルダム女子大学の山本智也さんを講師に招き、人間関係トレーニングを実施しました。開発教育セミナーで山本さんを講師に招くのは3回目、自分をひらき、ふり返りを通して自己理解に誘うスキルには定評があ

ります。

第1セッションでは、ホーナイの理論による「基本的対人態度測定インベントリー」という調査紙を用いて自分の人との関わり方の傾向に気づきました。これは、私たちが持つ基本的不安への防衛として「神経症的欲求」をあげ、これを測ることによって自分の関わり方の傾向を理解するものです。小グループで分かち合いをすると、それぞれの傾向に特徴があることが分かり、これを知ることによって他者への関わり方のヒントにしたいと思いました。

第2セッションでは、「たずねる」・「こたえる」・「観察する」という3つの役割を体験し、自分のコミュニケーションの特徴やくせを知るトレーニングをしました。自分の話したいことがうまく伝えられないもどかしさ、それによって自分自身が混乱してしまうことに気づき、あらためて

「話す」「聴く」難しさを実感しました。また、観察したことを相互にフィードバックすることで、自分のコミュニケーションの短所だと思いこんでいたところが相手にはそのように受け止められていないことがわかり、ほっとすることもありました。

第3セッションでは、一人ずつ絵を描き、それを使ってグループで1つの絵を完成させることを通して、グループで起こっていることに気づき、自分の関わり方について考えました。お互いに感情の表出を加減しながら、取り組むプロセスを楽しみました。



初めての参加者が多く、「しだいに緊張がほぐれ、自然に体験と話し合いが促進された」「いいメンバーに支えられて活動できた」と好評でした。

丸山まり子（奈良県安堵町立安堵小学校教諭）

《参加者アンケートから》

- ・同じことをしても、人によってまったく違った視点での気づきがあり、グループ内での意見の共有は、とても得るものが多かった。今までは、意識していなかった自分の長所などもわかり、勇気づけられた。
- ・コミュニケーションが上手いと、普段の生活でも違ってくる事があるのかなと思った。相手に興味を持って知ろうとする事が大事だと思った。
- ・自分の性格や話し方を他人から見てもらおうというのは、なかなかないので、おもしろかった。

2009年度 第2回 開発教育セミナー

「開発教育入門セミナー」

Think Globally, Act Locally～「足もと」と「世界」をつなぐ～

2009年6月13日（土）10:00～17:00

講師：佐藤 友紀（大阪府立四条畷高等学校）、塩見 登（京都市立弥栄中学校）、
中江 淳子（宇治市立木幡中学校）、西上 壽一（奈良県上牧町立上牧小学校）、
友前 尚子（南丹市立園部第二小学校）

会場：京都市国際交流会館

京都を中心に関西に住む多くの方に開発教育への第一歩を踏み出していただく目的で、京都府国際センター、京都市国際交流協会、JICA大阪と関西セミナーハウス開発教育研究会の4者が共催して開発教育入門セミナーを行いました。セミナーテーマは

“Think Globally, Act locally～「足もと」と「世界」をつなぐ～”とし、「なんでも?!100円ショップ」と「パーム油のはなし」の2つのワークショップを提供し、65名の参加がありました。

「何でも?!100円ショップ」では、バー



私たちのくらしを見えないところで支えているパーム油について、生産国で起こっている問題を知ることからはじめ、パーム油をめぐる模擬関係者会議という設定で環境、人権、くらしなど様々な観点で解決策を考えまし

た。参加者からは「普段考えたことのなかった便利さの裏側を知ることができて、とても考えさせられた」「生産現場の労働者の生活実態を知ることによって、これからモノの見方が変わる」などの感想がありました。また、「“知る”ことのみならず、“考える”“参加する”ことができた」「オープンエンドで考えること、ファシリテーターは受け手の気づきを促す種をまく、という考え方がとてもよかった」など、開発教育のめざす参加型の学びに対する気づきの声が多く寄せられました。

このセミナーが「足もと」と「世界」をつなぐきっかけになり、公正な地球社会づくりに広がっていくことを期待したいと思います。

佐藤友紀

世界の工場となった中国の実態などを踏まえながら、大量にモノを消費するわたしたちのくらしのありようを問い直していきました。また、「パーム油のはなし」では、

《参加者アンケートから》

- ・開発教育は、まったくの初心者でしたが、大変面白くためになりました。最初は教員中心のセミナーで、場違いかなと思っていましたが、いろんな年齢や立場の人がおられて、大変興味深いお話がけきました。
- ・様々なことを学ばせていただきました。充足感とともにもやもやが、多く残った気がします。この思いを次につなげて行きたいです。
- ・ただ「知る」ことのみならず、「考える」「参加する」ことができた。

「床を担いで歩き出した男の物語」

行き詰まった「共生」の思想を問い直す (マルコ2,1-12)

2009年6月20日 (土) 13:30 ~ 17:30

講師：岡山 孝太郎 (京都基督教福祉会理事長)

本シリーズの2回目。参加者の多くが、福祉や教育、そして人生の現場から、講師による聖書講義によって励ましを得たいという願いをもって集まってこられた。初回からの連続参加者が比較的多かったこと、そして、初回が一泊プログラムであったことも手伝って、互いの再会を喜びながら、親しみと和やかな雰囲気の中での開始となった。

このシリーズは、講師に導かれ、「マルコによる福音書」の精読を通して、福祉という営為を貫く聖書の思想を確認することを目的に計画されている。講師は、それを「新しい回生の旅」と呼び、聖書によって触発された新たな福祉創造への第一歩として考えておられる。

表題物語 (マルコ2章1~12節) について、今回も講師独自の釈義的検討が加えられ、現代における福祉とそれにかかわる者のエートスも含めて、聖書的「共生」の思想について対比的に論じられた。そのため、言及された話題は、人生や日常生活にまでおよび、多くの参加者が聖書の一言半句に自らの歩みを重ね合わせながら耳を傾けた。

講師によれば、中風の人を担いだ四人は神的働きの暗示でもあった。その働き

には、屋根という境界 (障害) を突破して救済を現実化する神の真実が宿されていたと考えられる。イエスは「彼らの真実」を見て、中風の人に「ゆるし」を宣したのであった。それは、中風の人が人間として「関係」のなかに回復されたとの宣言に他ならない。

中風の人とかれを担いだ四人との間に成立した関係は、ひとりの人の困難を共有したことによった。講師は、福祉という営みが本来的に家族などの基本的「関係」に属するものであったはずだと訴えながら、この物語によって、家族と福祉を

自由に往還しながら、両者に通底する「関係」の基本を語られた。

最後の「はなしあい」においては、教会教育や福祉現場における人材育成をめぐっても熱心な意見交換がなされた。

参加は27名。多くの参加者が、聖書によって自分の立つ場所を見直せたことを喜び、次回の再会を約束して散会した。ひとりではとても逢着しえない聖書の深奥を、すぐれた導き手の案内によって訪ね得たとする、多くの満足の声が寄せられた。

中村 信博 (同志社女子大学教授)



《参加者アンケートから》

- ・今回もとても勉強させていただきました。前回は、はげまされて職場に戻りました。教育、福祉は、神様によってなされること(神様によってしか成されない。神様の出会いによって、新しく人生を生きることができるといふ希望をもって働いています。)をいつも現場で感じています。
- ・先生のお話はいつも、お聞きしたあとで、自分の足の向きが少し変えられていく感じがします。

「闇に呑み込まれていった群集の物語」

福祉を解体する「解散」の思想を抉る（マルコ6,34-44）

2009年7月18日（土）13:30～17:30

講師：岡山 孝太郎（京都基督教福祉会理事長）

「話し合い」に参加して

私は、社会福祉施設に勤務していますが、今回あらためて自分自身の「福祉のありかた」を見つめ直し、また「キリスト教福祉とは何か」を学ぶために参加しました。

講師は、人が共に生きる絆が希薄な現実・状況を見据え、福祉教育者として、またご自身の人生の中から、福祉を語られ、聖書のメッセージの深い意味を丁寧に、そして静かな迫力をもって語られました。その新鮮なメッセージは私の心に染み入るものでした。

テーマの中の「飼う者のいない羊（群集）」は、他の人と共に生きている実感、絆が希薄で、自己責任と自助努力のみが求められ、分断されている孤独な私たちの不条理な現実のように感じます。キリスト教福祉のメッセージの中から、福祉はすべての人のためのものであり、人の生涯は福祉と共にあることを深く実感しました。

話し合いでは、児童施設利用者の将来問



題に苦慮されていること、福祉教育のあり方について、また他の現場では、利用者との出会いにより、いのちの大切さ、そして利用者の自然な心の広さに励まされることなど、それぞれの場での苦しみや喜びにあふれている現実を聴くことができました。

「福祉は他者の苦しみ痛みを感じ、他者の喜びを共に見出すこと」という話に共感しつつも、苦慮している問題に対し、今、具体的な方策を打ち出すことができないのも現実です。沈黙し、語りえぬ自分を感じることもさえます。それでも尚ひとりからでも現状を知り、改善のために動き始めることが求められていること、それは大きな動きとなり、やがて国の施策も動かすことになることを実感しました。そのためにもより広い福祉のネットワーク（理解、協力）にも参加し、話し合いの輪をひろげていくことが大切であると思います。

不条理にも生きにくい時代、社会といわれますが決して希望を見失ってはいけないと思います。この小さな集まりの限られた時間の話し合いであっても、また具体的な行動指針が示されたわけでもなく、ひとりひとりが受け止めたキリスト教福祉のメッセージを自分の居場所・地域社会において、どのように実践し展開していくのか、そしてその喜び、あるいは困難さを再びこの「話し合い」に集いの場に持ち帰り、問題提起できるかが課題になると思います。

姫野真知夫（社会福祉法人びわこ学園）

《参加者アンケートから》

- ・福祉の基本となること、福祉において大切なこと、知る、受け止める、分け与えていく…。様々なことを学ばせていただきました。実際に福祉の場で生きている者にとって、これからの壁にあたったときに、大きな力となりました。
- ・たった一言の言葉に複数の意味がある…。深いものなんだなあと思うことができました。

2009年度 第3回 開発教育セミナー

「グローバルゼーションと日本の貧困」

2009年7月25日（土）16:00～7月26日（日）12:00

講師：湯浅 誠（NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長）

7月25日（土）午後～26日（日）昼にかけて、開発教育研究会の第3回目のセミナーを開催した。「貧困問題」に対する関心も高く、またリソースパーソンが湯浅誠さんということもあり、この日初めてセミナーハウスを訪れる方も含めて、36名もの参加者があった。



湯浅さんは、テレビで拝見するクールなイメージとは違い、ご本人はとてもおだやかな雰囲気をお持ちで、参加者とともに和やかな時間を過ごすことができた。また、自らを「活動家」という湯浅さんの活動家像や目指す社会像から

も、多くのことが学べた。

1日目は、クイズで日本の貧困の現状を確認し、ウェビングで「貧困とは何か」を考えた後、1996年から野宿者支援活動に関わり、また年末年始の「年越し派遣村」の村長を務められた湯浅さんに、「製造業派遣」で働く人の現状と日本の雇用破壊の現実、使えないセーフティネット、「すべり台社会」の現実についてお話しいただいた。

現在、20代前半の若者の約半分、全労働者の3人に1人が「非正規雇用」だと言われている。昨年秋からの世界不況で、11月以降、日本でも「派遣切り」により多くの人が仕事と住まいを失い路上に投げ出されたという。

2日目は、アクティビティのあと、グローバルゼーションの中で、世界的に格差がどのように広がっているのかを、メキシコやバングラデシュを例に、多国籍企業の活動を挙げながらお話しいただいた。参加者からは時間が足りないぐらい様々な質問が出され、活発な意見交流がなされた。



夜の交流会も含め、参加者のみなさんと有意義な時間を共有することができた二日間であった。

中江淳子（宇治市立木幡中学校教諭）

《参加者アンケートから》

- ・“溜め”という言葉が、びたりときた。言葉を的確に使うことがいかに大切か、湯浅さんのお話と著作から学んだ。人を動かすのは言葉。そして、タイミングも重要だと思った。“搾取の構造”が日本では隠されていること。それらを可視化すること。それをどうすればよいか、考えていきたい。
- ・ワークを期待したが、非常に受け身で、湯浅さんの「教えを乞う」ような内容だったのは残念。
- ・グループで話をする企画が、非常に有効だと思った。
- ・参加者どうして話す場面が多く、聞きっぱなしではないのがよかったです。
- ・貧困というと、アフリカなどのイメージが強かったが、絶対的貧困と相対的貧困があるとか、日本の中の貧困を考えるきっかけになった。

2009年度 9～12月

主催・共催プログラム予定

会場：特に記載のないものは、
関西セミナーハウス

■第1回 お茶こころえの会

「お月見の会」
日時：9月17日(木) 16:00～19:30
参加費：8,000円(抹茶、夕食代込み)

■修学院フォーラム「福祉」

第5回 「死の変貌を見詰めていた女の物語」
一夜明けを告げる「先行」の思想を生きる
(マルコ16,1-8)

講師：岡山孝太郎(京都基督教福祉会理事
長)

日時：9月19日(土)13:30～17:30
参加費：2,000円(学生500円)

■第4回 開発教育セミナー

「水俣フィールドスタディ～公害の原点を訪ねて」

講師：坂西 卓郎(元水俣病センター相思社
職員)

日時：9月20日(日)～22日(火)
参加費：30,000円(現地宿泊、食費、活動費
込み) ※現地を訪ねます。

■修学院フォーラム「老い」

第2回 「存在・自己・生命の意義を見つめる」

講師：藤縄 昭(京都大学名誉教授)
田部郁彦(日本キリスト教会西都教会牧師)
日時：9月25日(金)18:00～26日(土)
13:00

参加費：13,000円、学生10,000円(1泊3
食、プログラム込み)

■修学院フォーラム「生命」

第1回 「キリスト教とiPS研究」
講師：戸口田淳也(京都大学iPS細胞
研究センター副センター長)
シュペネマン クラウス(同志社
大学名誉教授)

日時：10月9日(金)18:00～10日(土)15:00
参加費：13,000円、学生10,000円(1泊3食、
プログラム込み)

■第5回 開発教育セミナー

「〈たぶんかきょうせい〉と〈外国人労働者〉～
私たちの社会をだれと一緒に築くのか」
講師：鈴木 健(カラカサン～移住女性のた
めのエンパワメントセンター事務局長)

日時：10月31日(土)16:00～11月1日(日)
12:00
参加費：10,500円(1泊2食、プログラム込み)

■修学院フォーラム「生命」

第2回 「キリスト教における生と死の概念」
講師：白方 誠彌(前日本バプテスト病院院長)
岡山孝太郎(京都基督教福祉会理事長)

日時：11月14日(土)13:30～17:30
参加費：2,000円(学生500円)

■もみじまつり

日時：11月23日(月・祝)9:00～16:30
安田美穂子賛美コンサート、茶席、能楽、
邦楽席、春名康範マンガ展 他

■第6回 開発教育セミナー

「〈公正〉な貿易って何だろう？～フェアト
レード・チョコレートをとどる旅」

講師：鈴木 紀(国立民族学博物館准教授)
日時：12月12日(土)16:00～12月13日
(日)12:00
参加費：10,500円(1泊2食、プログラム込み)

日が暮れると、蟬時雨に代わって、草むらからは、虫の音が聞こえます。残暑から秋へ、季節は忘れず移っていきます。

この春から、所長、スタッフとも新顔でお世話になっております。

いろいろと不手際の節は、どうぞご容赦ください。一層のご指導、ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

発行人：小久保正(関西セミナーハウス活動センター運営委員長)

発行所：(財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23 電話：075-711-2115 FAX：075-701-5256

E-メール：office@academy-kansai.org ホームページ：http://www.academy-kansai.org/